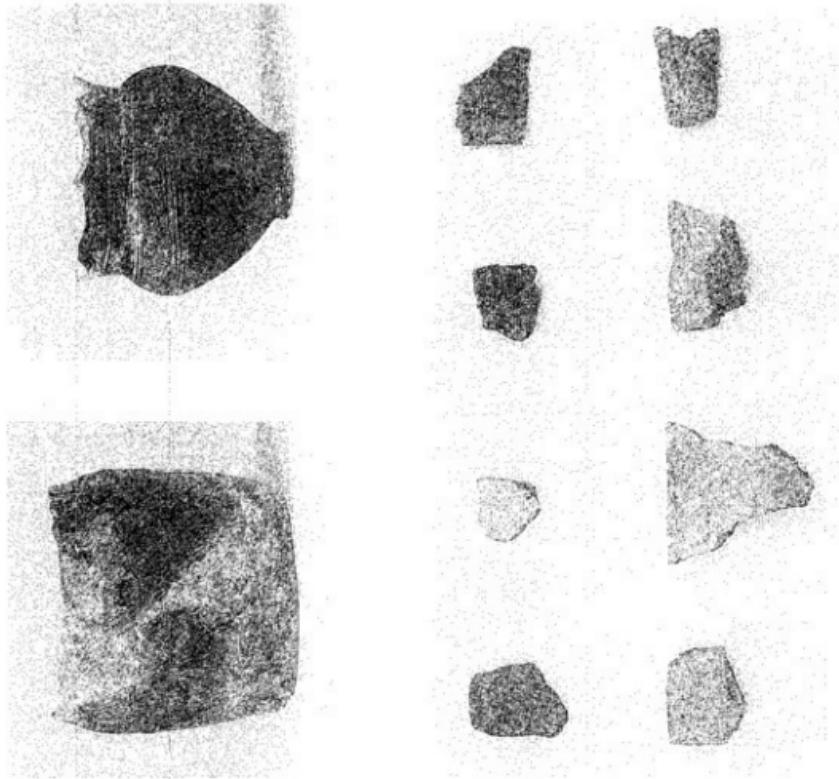
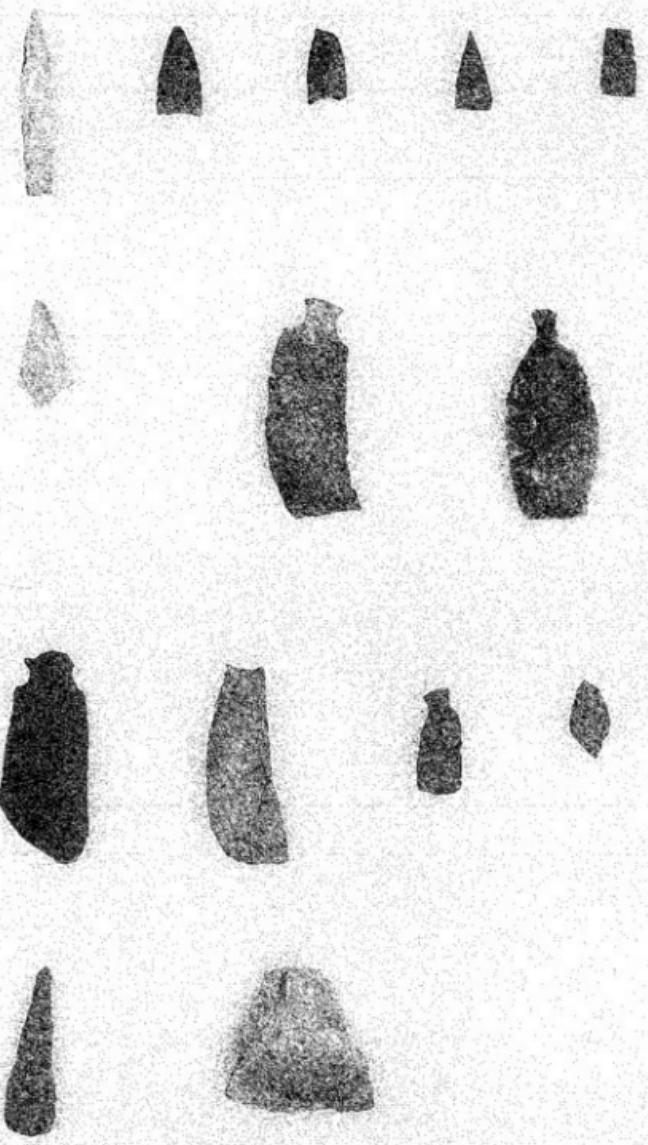
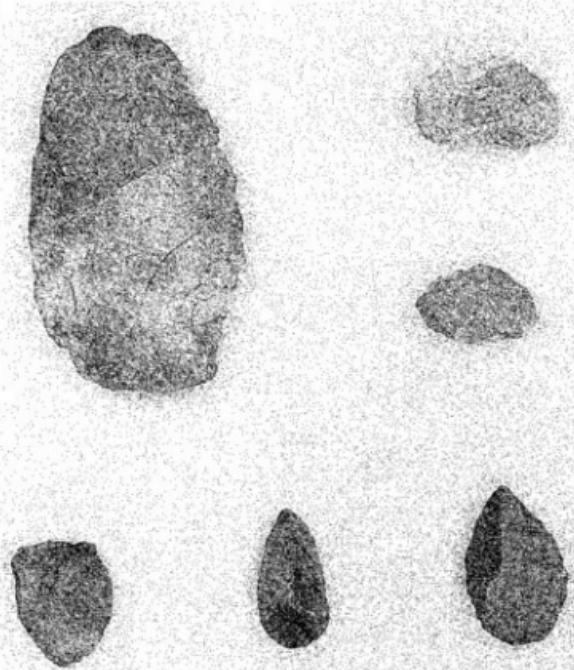


遗体外出土器

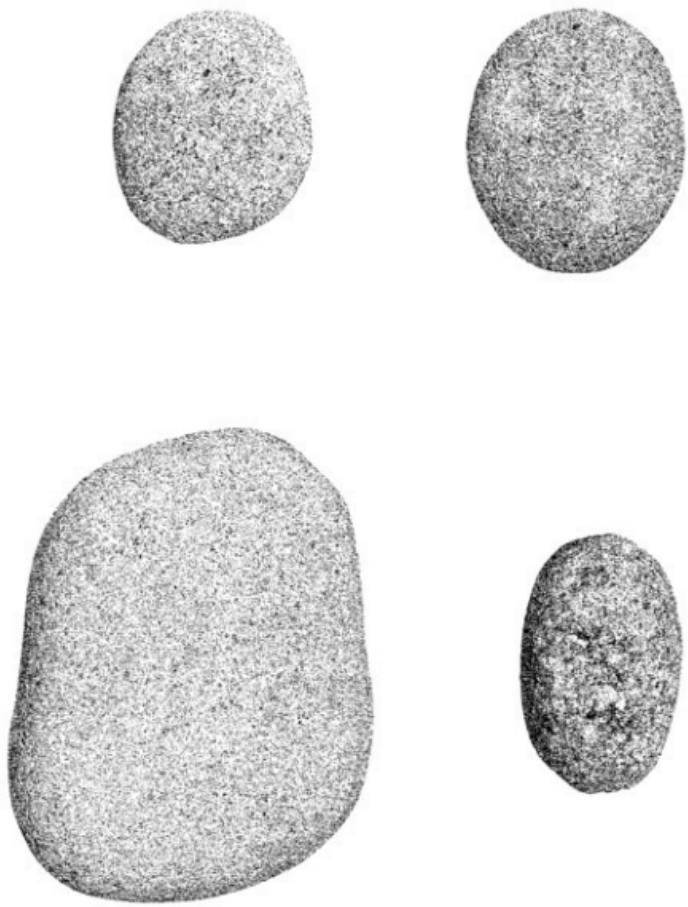




遺構外出土石器



遺構外出土石器



遺構外出土石器

地蔵田 A 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形





第2図 グリッド配置図

遺跡の概観

御所野台地の南側、JR奥羽本線四ツ小屋駅から南東へ900mの地点である。東側に沢が入り込み、標高は約30mである。

調査は遺跡の東部を実施し、他は来年度継続調査の予定である。調査の結果、平安時代の堅穴住居跡、建物跡、土壙等が検出された。

隣接する遺跡は、東側約100mに旧石器時代、縄文時代中期、平安時代の「秋大農場南遺跡」、北側約500mに縄文時代中期、弥生時代、平安時代の「坂ノ上F遺跡」等の関連遺跡が所存する。

遺構と遺物

堅穴住居跡

1号住居跡（第3図）

調査区の北側で検出された。

プランは長軸2.4m、短軸2.2mのほぼ方形を呈し、6号土壙に切られている。確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方向は北に対して西に15度振れている。ピットは住居内外に7個検出されたが、主柱穴は各コーナーの4個である。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は東袖の一部が残存し、拡大や人頭大の川原石を芯材としている。燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は構状に検出され、壁外へ135cm延びる。床はほぼ平坦で全体的に堅い。

出土遺物

土器

土師器壺、内黒土師器杯、赤褐色土器杯（底部切り離し回転糸切り無調整）の破片が少量出土しているが、図示できなかった。

2号住居跡（第4図）

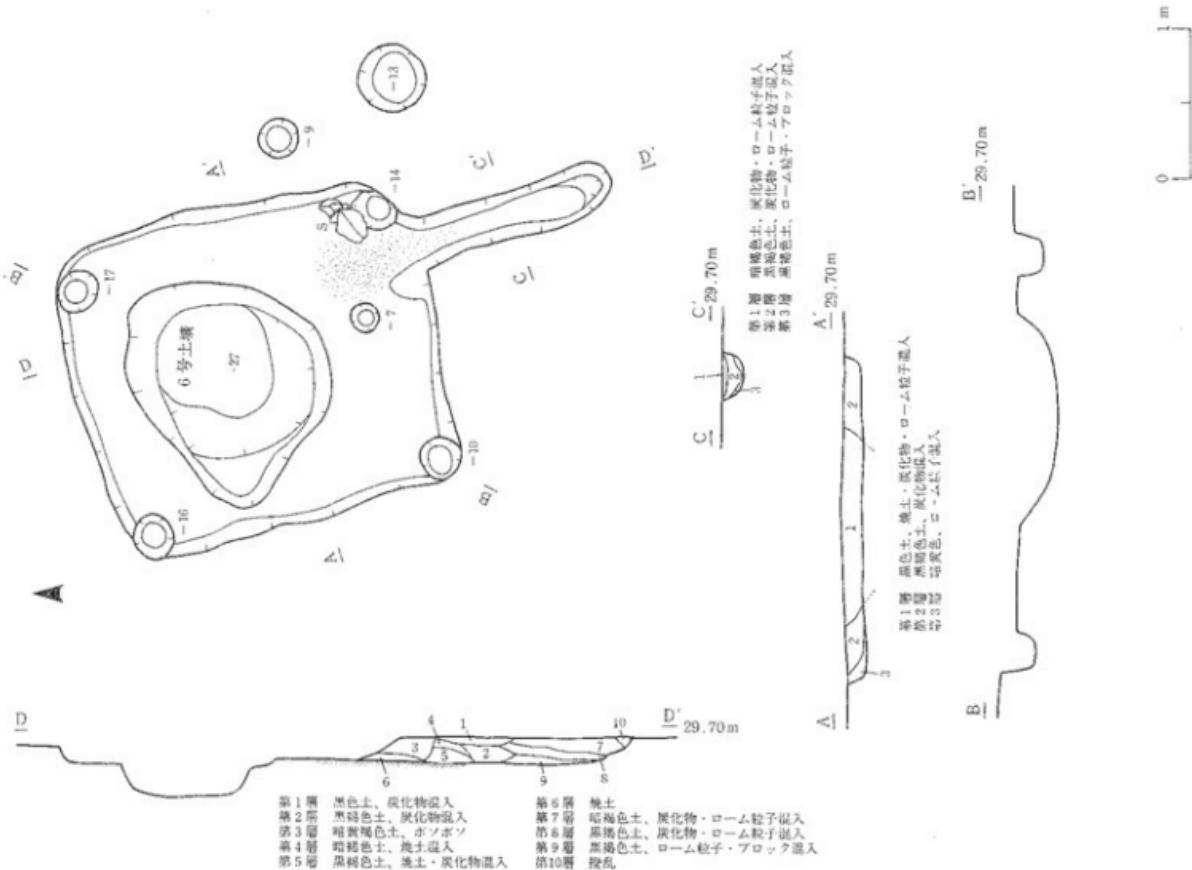
調査区の北側で検出された。

プランは一辺3.3mの方形を呈し、2号建物跡の南西隅のピットに切られている。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方向は西に対して南へ13度振れている。ピットは住居内外に多数検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは東壁の北側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変し、赤褐色土器杯を伏せて支脚としている。煙道部は短く、全体的に火熱を受けている。床はほぼ平坦で全体的に堅いが、カマド周辺が特に堅い。

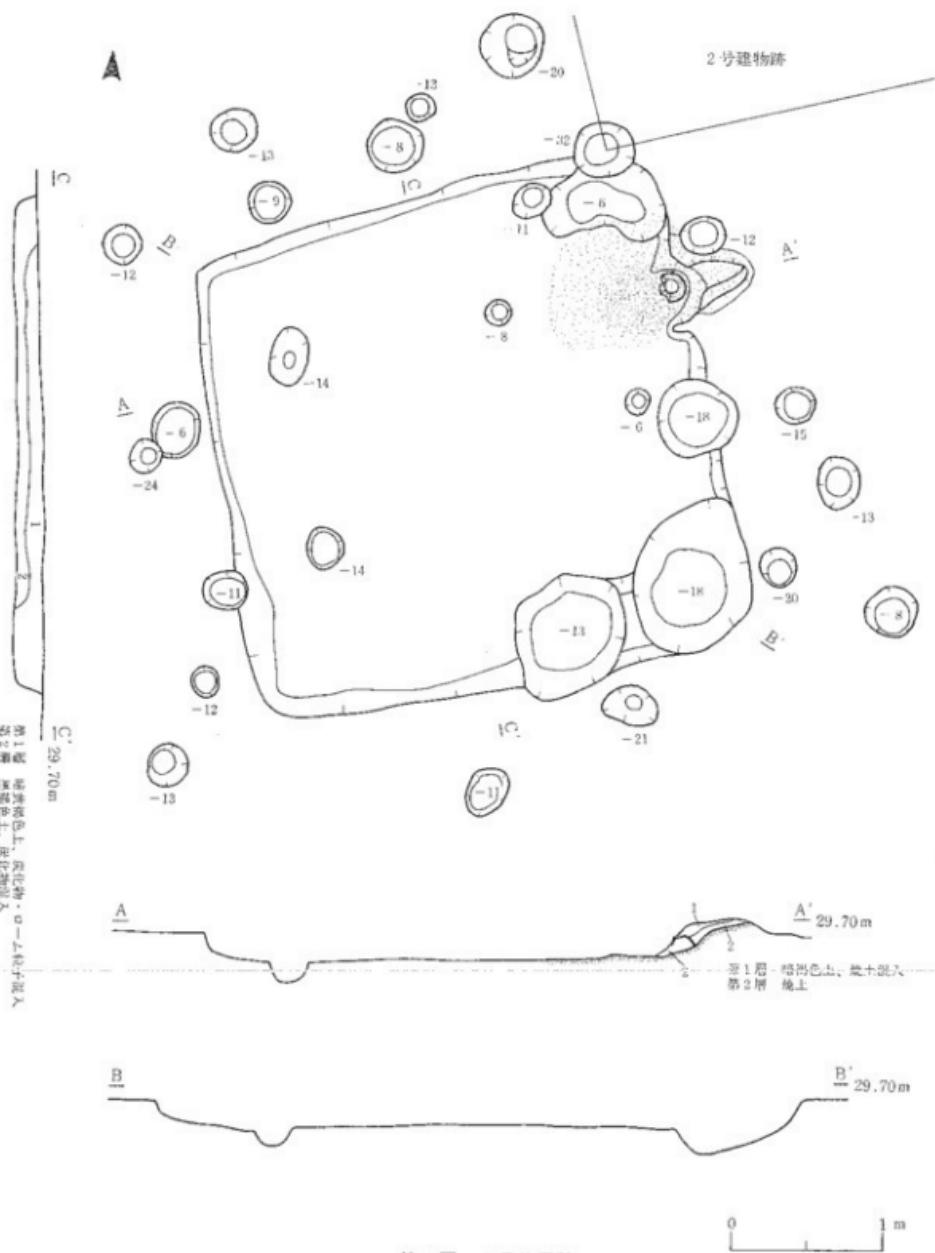
出土遺物

土器（第7図1～4）

1は床面、2はカマド支脚、3は覆土、4はピット出土である。1、2は赤褐色土器杯である。いずれも底部切り離し回転糸切り無調整で、底部より緩く内湾しながら立ち上がる。3は須恵器長



第3図 1号住居跡



第4図 2号住居跡

頭臺で、体下部を欠く。頭部にリングが回り、ロクロ成形後、全体にナデを施して整形している。4は土師器甕である。長胴で、頭部が「く」の字状に外反する。外面は縦位に、内面は横位に刷毛目調整を施している。他に内黒土師器台付坏、須恵器甕の破片が出土している。

3号住居跡（第5図）

調査区の北側で検出された。

プランは長軸3.7m、短軸3.6mのほぼ方形を呈し、北側へ1.7m拡張している。2、3号建物跡、8～11、15号土壤と重複し、11号土壤以外の遺構に切られている。確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、周溝が認められる。主軸方向は北に対して西へ12度振れている。ピットは多数検出されたが、主柱穴は各コーナーの4個で、拡張部のコーナーにも認められる。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は良好な状態で残存し、黄色粘土で構築され、束袖は小児人頭大の川原石を芯材としている。燃焼部は火熱を受けて赤変し、人頭大の川原石を支脚としている。煙道部は溝状で一部トンネル状に検出され、壁外へ1.4m延び、底・側面が火熱を受けている。床はほぼ平坦で全体的に堅いが、カマド周辺が特に堅い。

出土遺物

土器（第7図5～11）

8、9はカマド、10は床面、5～7、11は覆土出土である。10は内黒土師器台付皿である。底部切り離し後に台を付けているが、切り離しは不明である。5～9は赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り無調整で、底部より緩く内湾しながら立ち上がる。6の内外面にはタール状の付着物が認められる。7の底部には墨書が認められるが、判読は不明である。11は須恵器蓋である。切り離しは不明で、天井部から体部にかけて回転ケズリ調整を施し、ツマミは欠けている。内面はすべすべして墨痕が認められ、硯に転用したと考えられる。他に土師器甕、赤褐色土器甕、須恵器坏（底部切り離し回転糸切り無調整）の破片が出土している。

4号住居跡（第6図）

調査区の北部で検出された。

プランは長軸2.8m、短軸2.7mのほぼ方形を呈し、7号土壤に切られている。確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方向は北に対して西に22度振れている。ピットは4個検出されたが、主柱穴は不明である。カマドは南壁の東側に構築されている。袖部は壊れ、燃焼部は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ85cm延び、壁付近に小～中礫が組まれている。床は東側に段が付き、全体的に堅い。

出土遺物

土器（第7図12、13）

12、13は覆土出土で、いずれも赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り無調整で、底より緩く内湾しながら立ち上がる。13の外面の一部にはタール状の付着物が認められる。他に赤褐色土器甕、須恵器坏（底部切り離し回転糸切り無調整）の破片が出土している。

建物跡

1号建物跡（第8図）

調査区の中央部で検出された。

桁行3間、梁間2間の東西棟4面廂付掘立柱建物跡で、周囲が溝に囲まれている。主軸方向は梁間が北に対して西へ13度振れている。身舎の柱間は桁行が南側柱列で西から2、3+2、2+2、3m、梁間が西妻で南から2、8+2、7mである。柱掘り方は径60~80cmの円形を呈するが、北西隅の1個は方形である。深さは25~37cmで、径約30cmの柱痕の認められるものもある。廂は4面にみられ、身舎の柱筋とほぼ一致するが、各コーナーの柱穴は若干内側に入っている。柱掘り方は径45~80cmの円形及び楕円形を呈するが、身舎と比較すると若干小さいものもあり、深さは5~24cmで浅い。また、削平等により検出されない掘り方もある。溝は幅60~160cm、深さ5~48cmで、南西、南東、北西隅及び南辺中央部が途切れている。断面形は「U」字状、鍋底状、平底をなし、深浅が認められる。

出土遺物

土器（第13図14）

14は溝跡覆土出土の赤褐色土器坏である。底部切り離し回転糸切り無調整で、底部より緩く内湾しながら立ち上がる。他に土師器甕、赤褐色土器甕、須恵器坏（底部切り離し回転糸切り無調整）・台付坏の破片が溝跡覆土から、赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り無調整）・甕、須恵器坏（底部切り離し回転糸切り無調整）の破片が柱掘り方覆土より出土している。

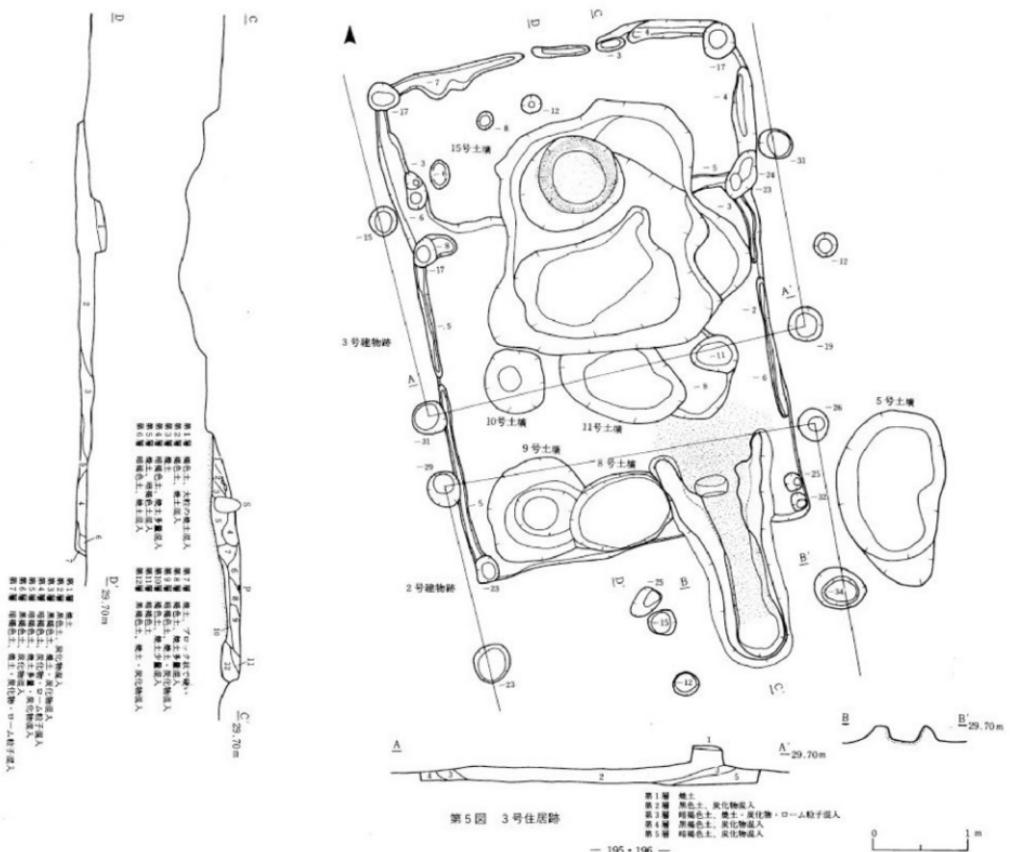
石器（第15図1）

1は溝跡覆土出土の石器である。無茎で、基部がくぼむものである。両面の側縁から2次加工を施して形を整えている。石質は硬質頁岩である。

2号建物跡（第9図）

調査区の北側で検出された。

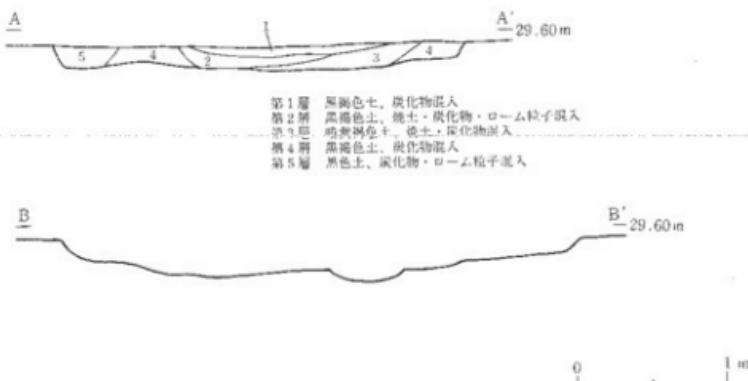
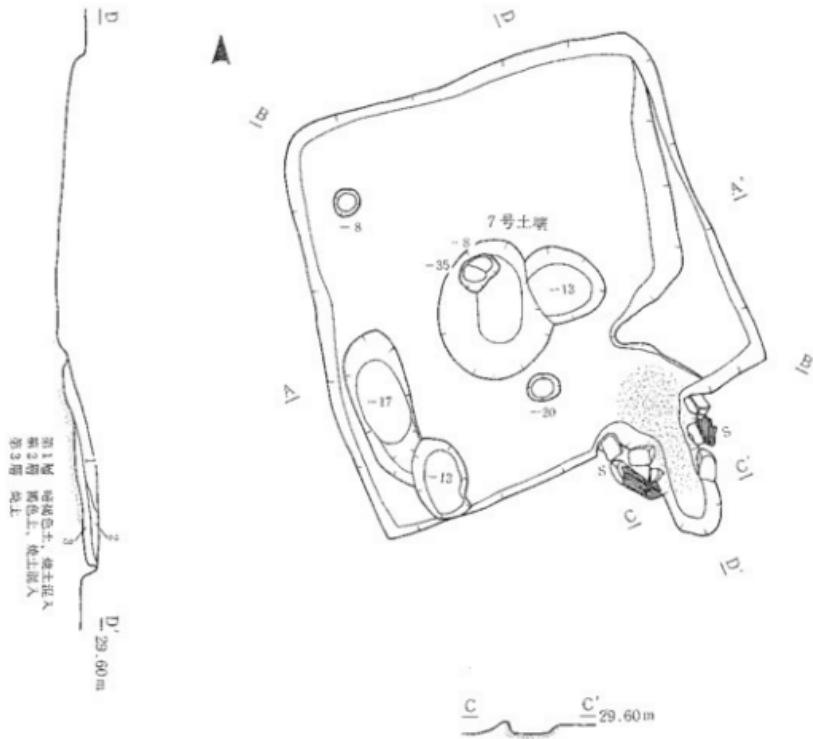
桁行3間、梁間1間の南北棟の掘立柱建物跡である。主軸方向は桁行が北に対して西へ12度振れている。柱間は桁行が西側柱列で南から1、9+2+1、9mで、梁間が南妻で3、7mである。柱掘り方は径35~50cm、深さ16~34cmである。2、3号住居跡と一部重複するが、本建物跡が新しい。



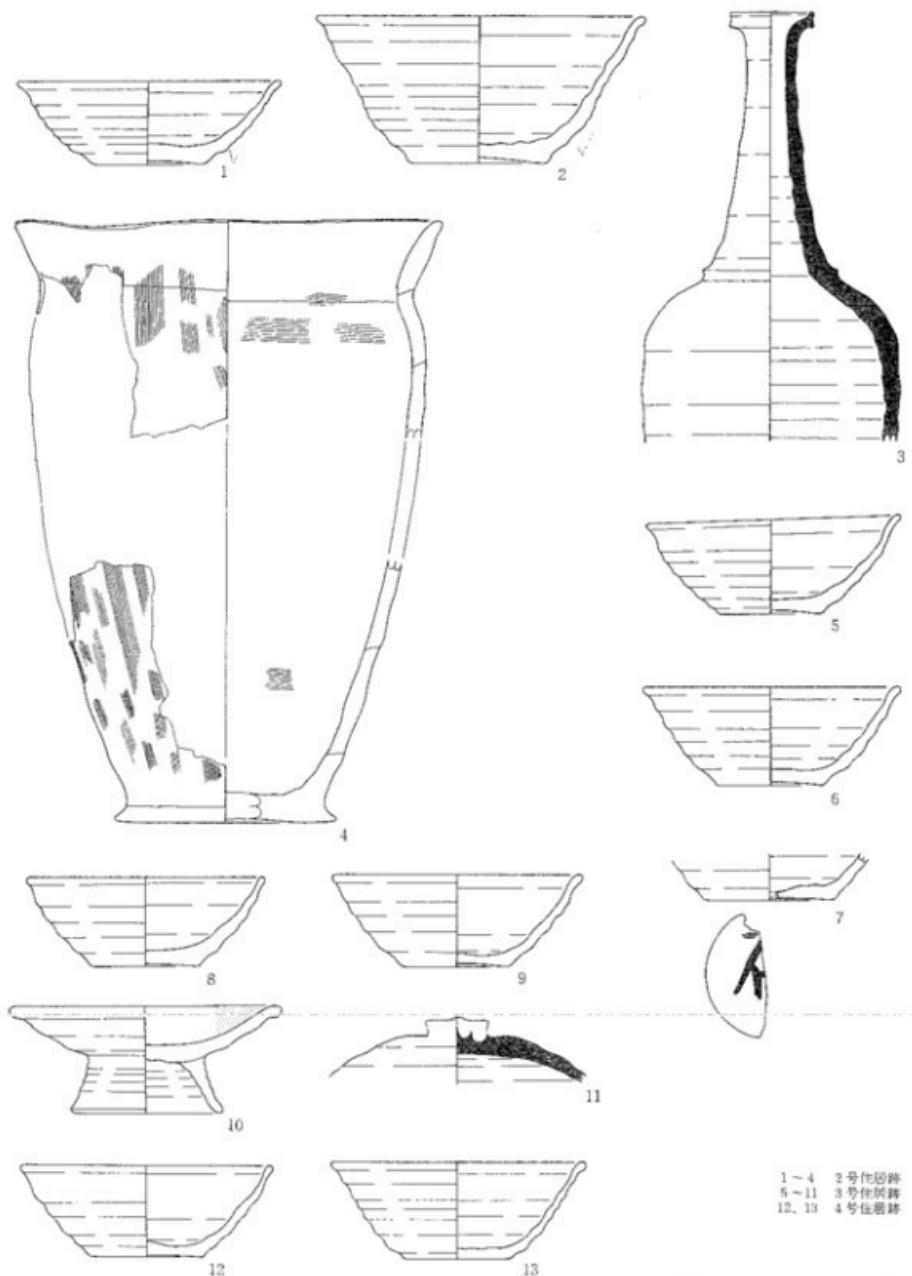
第5図 3号住居跡

■ 1: 灰土
■ 2: 黑色土, 灰化物混入
■ 3: 黑色土, 灰化物混入, 烧土
■ 4: 黑色土, 灰化物混入, 烧土
■ 5: 黑色土, 灰化物混入

- 195 * 196 -



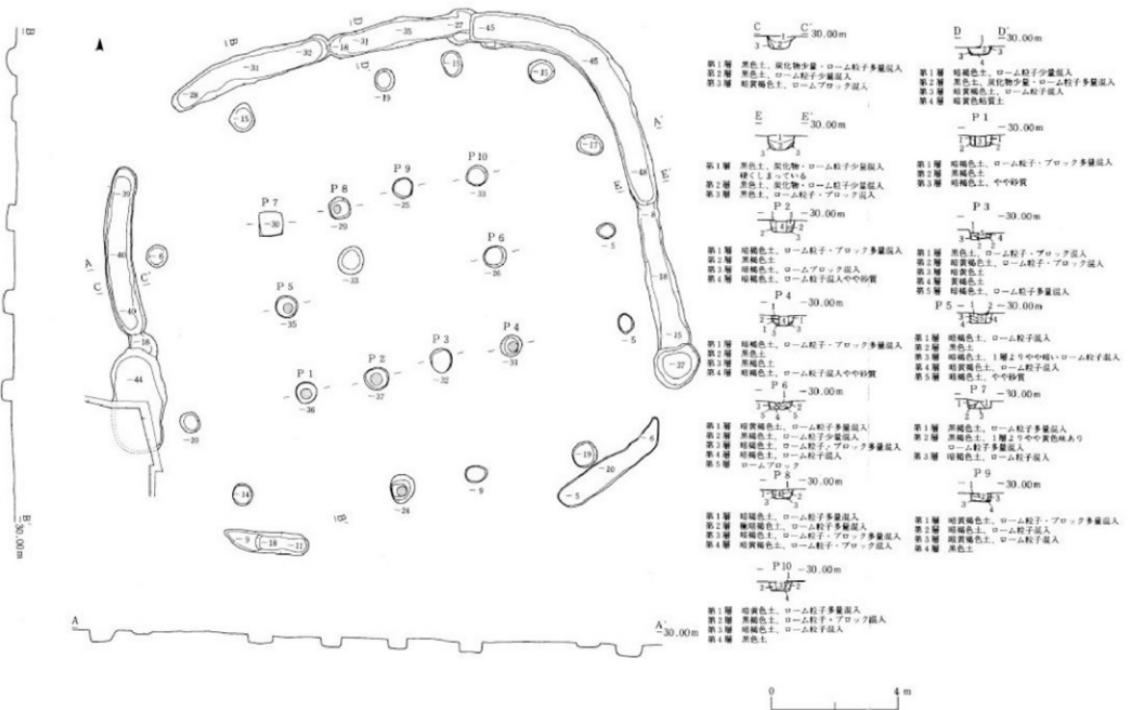
第6図 4号住居跡



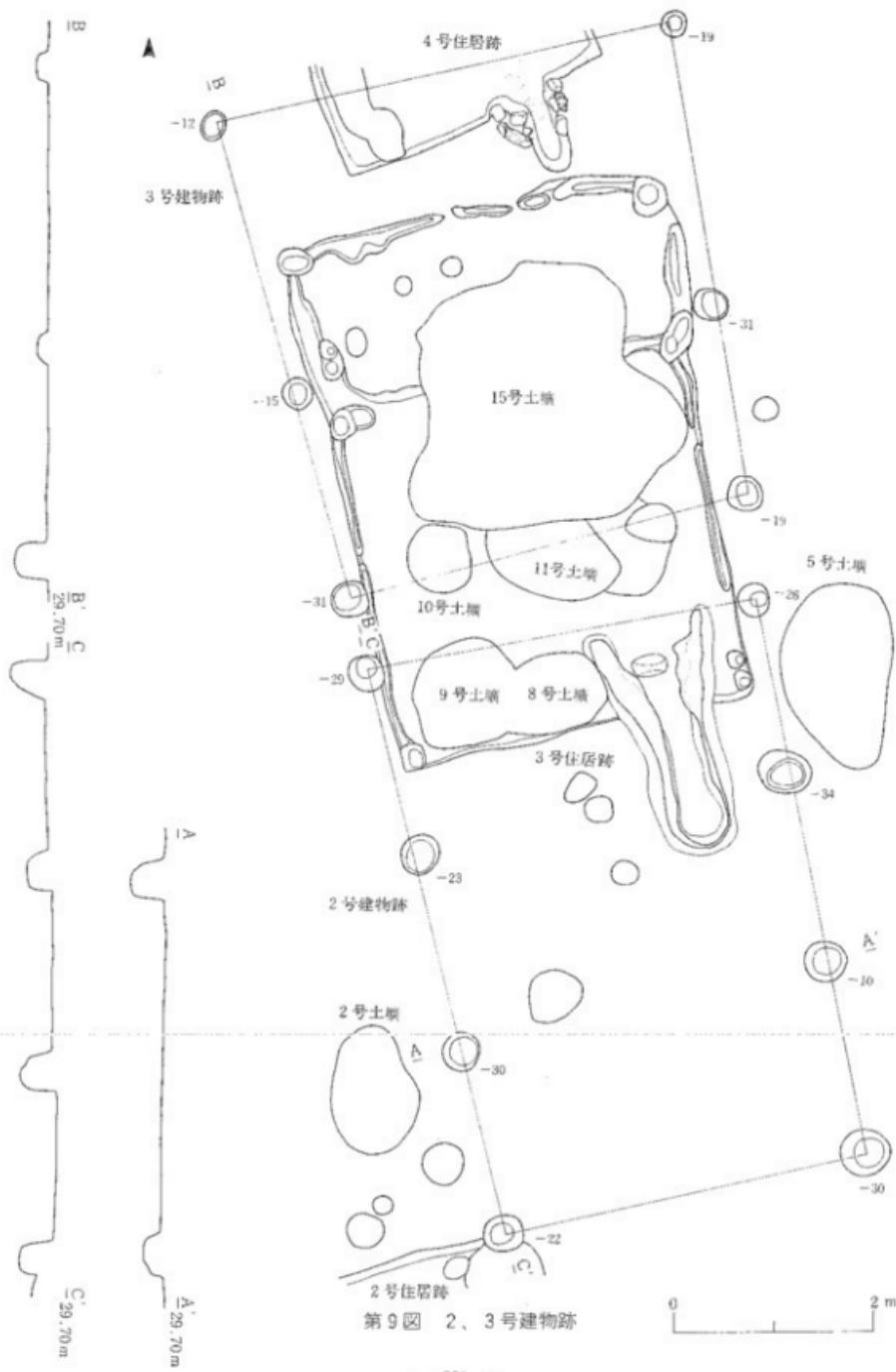
第7図 遺構内出土土器

1～4 2号住居跡
5～11 3号住居跡
12, 13 4号住居跡



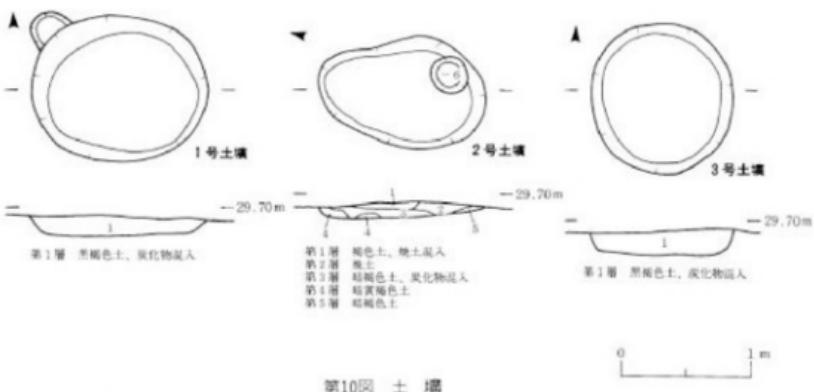
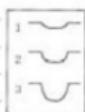


第8回 1号建物跡

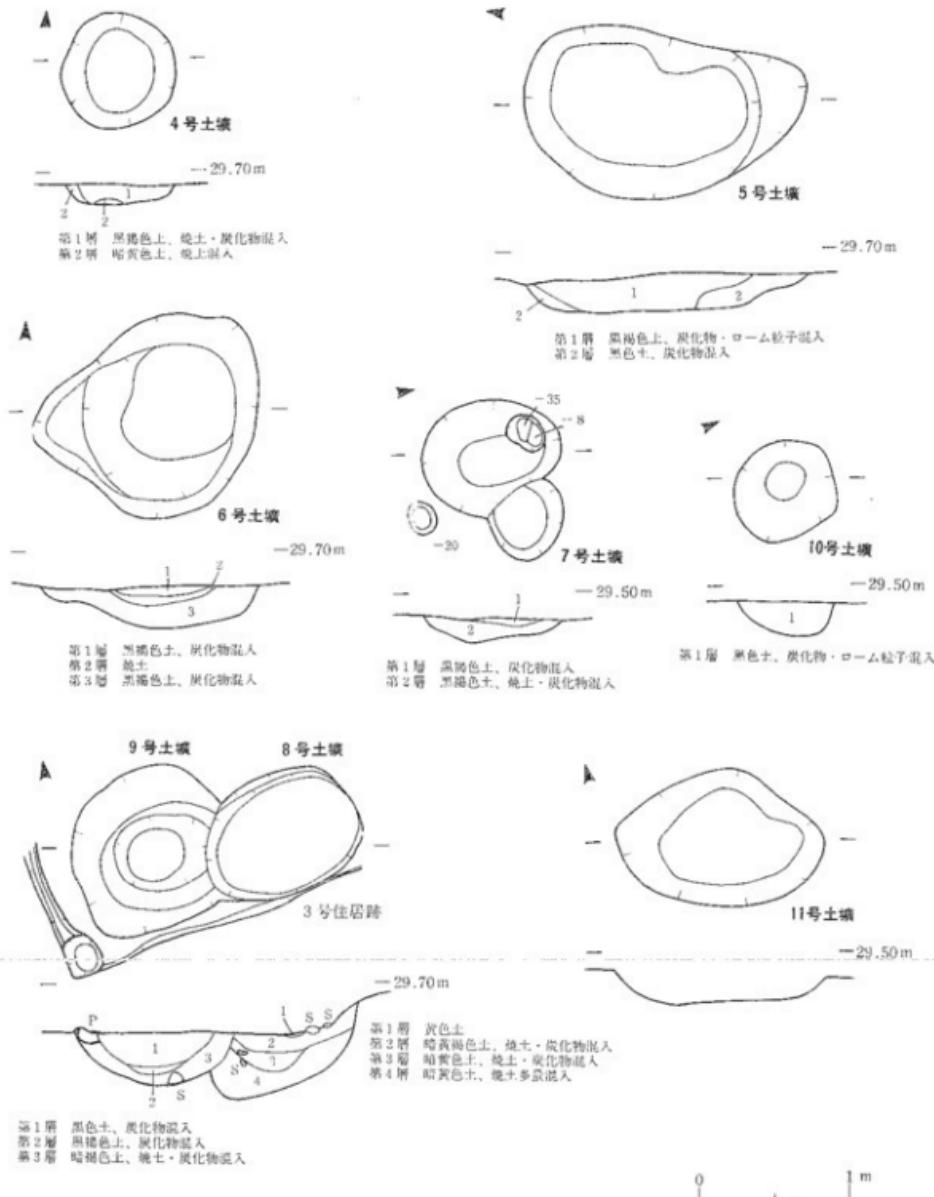


土壤一覽表

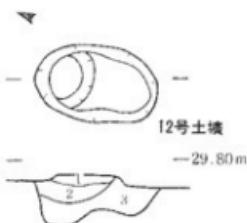
番号	規 模(cm)			平面形	断面形	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ			
1	134	111	15	椭円形	2	土師器壺破片・赤褐色土器環・壺破片・須恵器環破片
2	130	86	10	椭円形	1	第13図15赤褐色土器环・土師器壺破片・赤褐色土器壺破片
3	115	108	17	椭円形	2	
4	75		14	円 形	2	
5	187	110	22	椭円形	2	赤褐色土器環・壺破片
6	150	138	28	椭円形	2	第13図16・17赤褐色土器环・土師器壺破片・内黒土器環破片・赤褐色土器壺破片
7	106	80	44	椭円形	2	
8	107	100	35	椭円形	3	第13図18～22赤褐色土器环・23、24須恵器環・土師器壺破片・内黒土器環破片・赤褐色土器壺破片
9	92	78	15	椭円形	3	
10	67	62	22	椭円形	2	土師器壺破片・赤褐色土器環・壺破片
11	138	92	18	椭円形	2	
12	80	50	30	椭円形	2	
13	75	64	10	椭円形	1	
14	115	68	12	椭円形	1	
15	264	210	50	椭円形	3	第13図27、28須恵器環



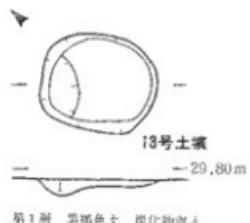
第10図 土 壤



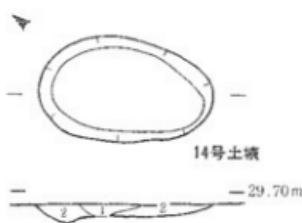
第11図 土 壤



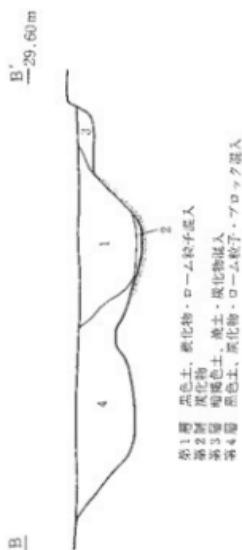
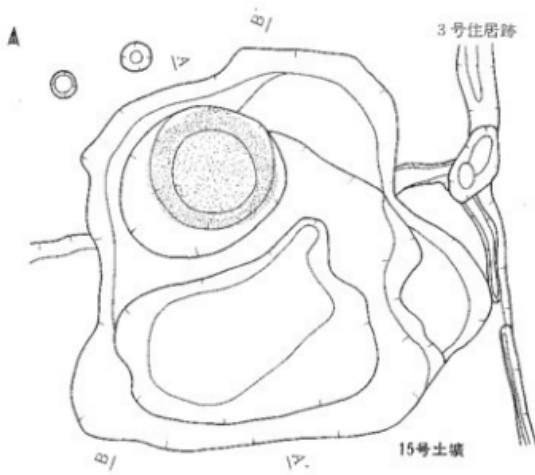
第1層 黃色土
第2層 貧褐色土、鐵土・炭化物混入
第3層 黑色土、炭化物混入



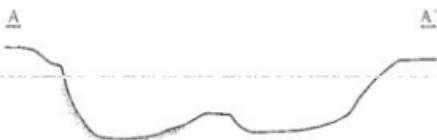
第1層 黑褐色土、炭化物混入



第1層 黑褐色土、炭化物混入
第2層 暗黃褐色土

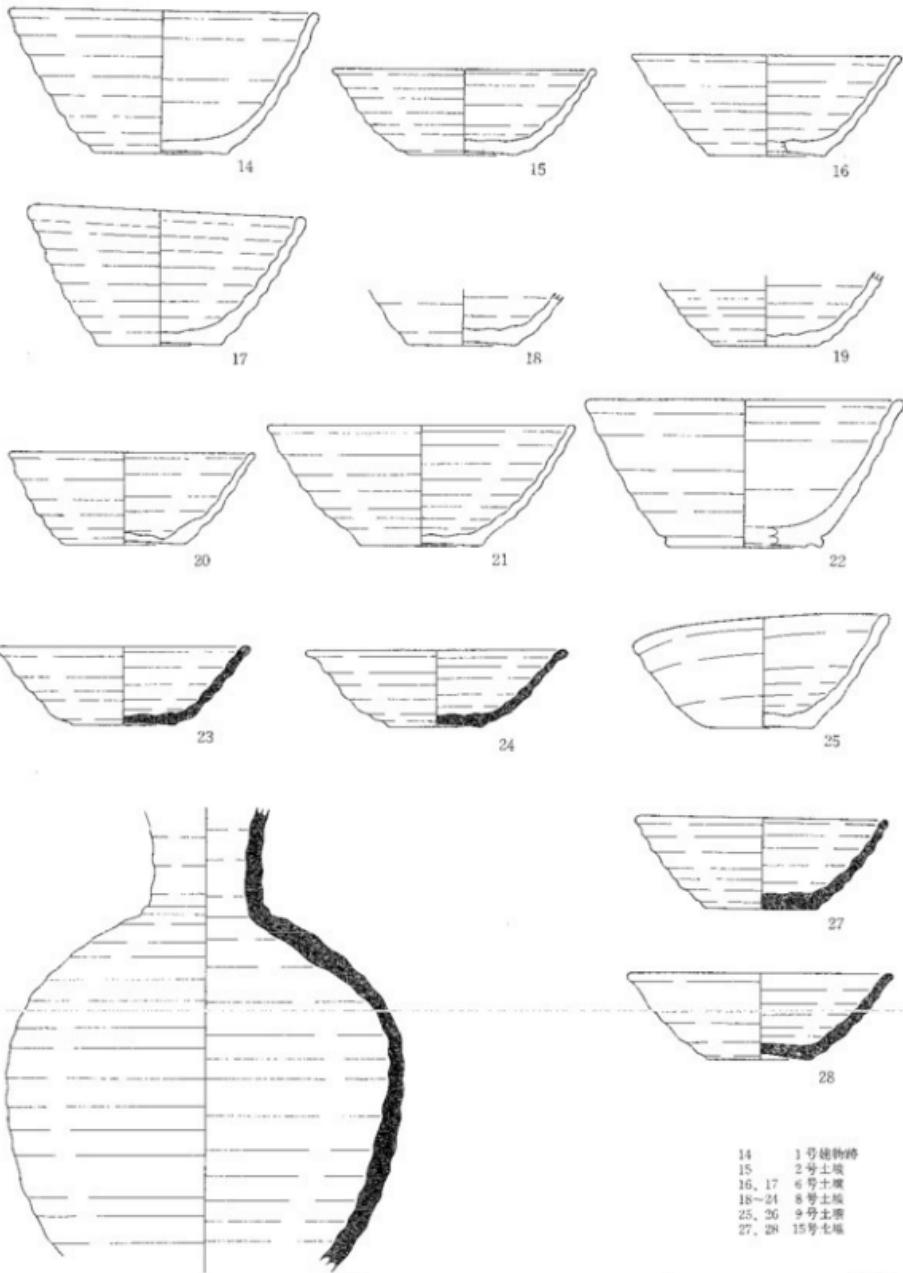


第1層 黑色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層 黑褐色土、炭化物混入
第3層 黑色土、炭化物・ローム粒子・ガラス質混入
第4層 黑色土、炭化物



0 1 m

第12図 土 壤



第13図 遺構内出土土器

14 1号施物跡
 15 2号土壙
 16, 17 6号土壙
 18~24 8号土壙
 25, 26 9号土壙
 27, 28 15号土壙



3号建物跡（第9図）

調査区の北側で検出された。

桁行2間、梁間1間の南北棟の掘立柱建物跡である。主軸方向は桁行が北に対して西へ12度振れている。柱間は桁行が西側柱列で南から2.1+2.8m、梁間が南妻で4.1m、北妻で4.7mである。柱掘り方は径25~35cm、深さ12~31cmである。3号住居跡と一部重複するが、本建物跡が新しい。

土壌出土土器（第13図15~28）

8基の土壌から土器が出土している。15~22、25は赤褐色土器坏で、2、6、8、9号土壌より出土している。底部切り離しは、20が静止糸切り無調整、22が回転糸切りで体部下端及び底部にケズリを入れて低い台としている。他は回転糸切り無調整で、底部より緩く内湾しながら立ち上がる。19、20の内面にはタール状の付着物が認められる。23、24、27、28は須恵器坏で、8、15号土壌より出土している。底部切り離し回転糸切り無調整で、底部より緩く内湾しながら立ち上がる。27の内面はすべすべして墨痕が認められ、硯に転用したと考えられる。26は須恵器長頸甌で、9号土壌より出土している。頸部にリングがあり、外面に自然釉がかかる。他に各土壌より土師器甌、内黒土師器坏（底部切り離し不明）・甌、赤褐色土器甌の破片が出土している。

遺構外出土土器

遺構外出土土器を縄文時代、平安時代に大別した。

縄文時代（第14図29~32）

29~32は縄文地文のみの施文で、深鉢形ないしは鉢形の器形をなすものと考えられる。29はRL単節斜縄文（縦位回転）、30、32はLR単節斜縄文（横位回転）、31はRL原体による羽状縄文である。

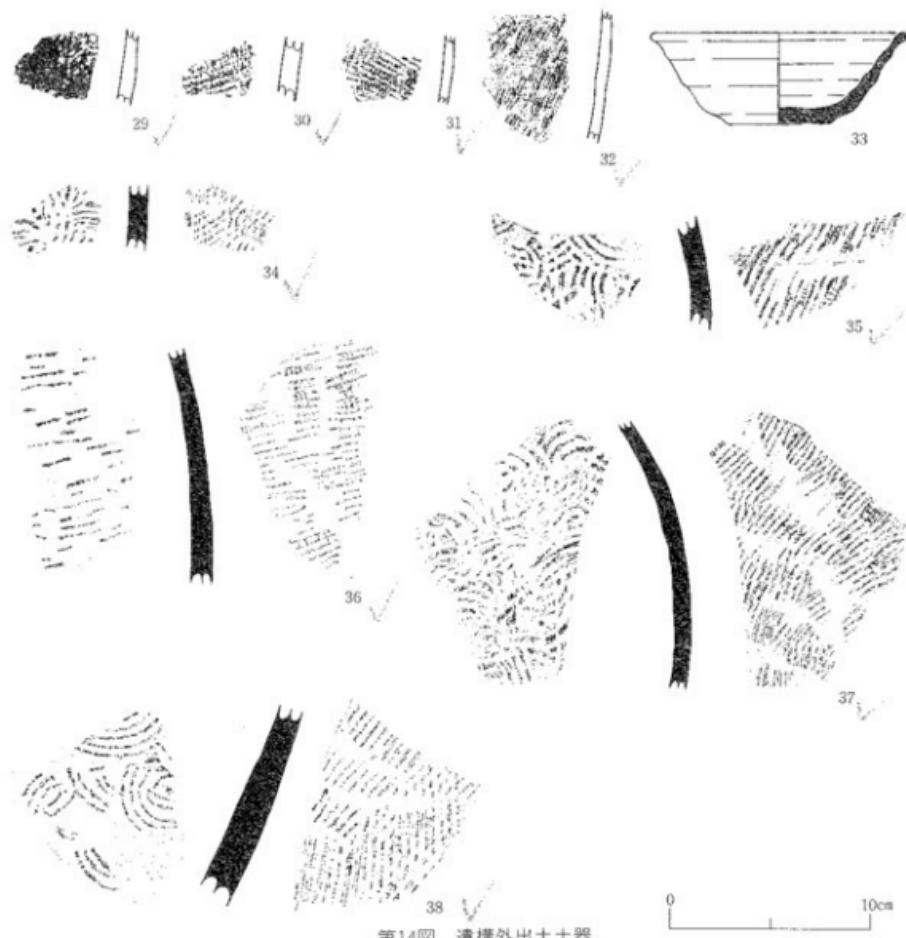
平安時代（第14図33~38）

33は須恵器坏である。底部切り離し回転糸切り無調整で、底部より緩く内湾しながら立ち上がる。34~38は須恵器甌である。外面は平行印板痕、内面は36が平行、他は同心円状のアテ板痕が認められる。35の外面には自然釉がかかる。他に上師器甌、内黒土師器台付坏、赤褐色土器坏（底部切り離し回転糸切り無調整）・甌、須恵器甌の破片が出土している。

遺構外出土石器

石匙（第15図2、3）

2点出土している。いずれも縦型であるが、3は細身でゆるく湾曲している。背面全面と主要剝離面の一部に二次加工を施している。石質は硬質頁岩である。



第14図 遺構外出土土器

打製石斧（第15図4）

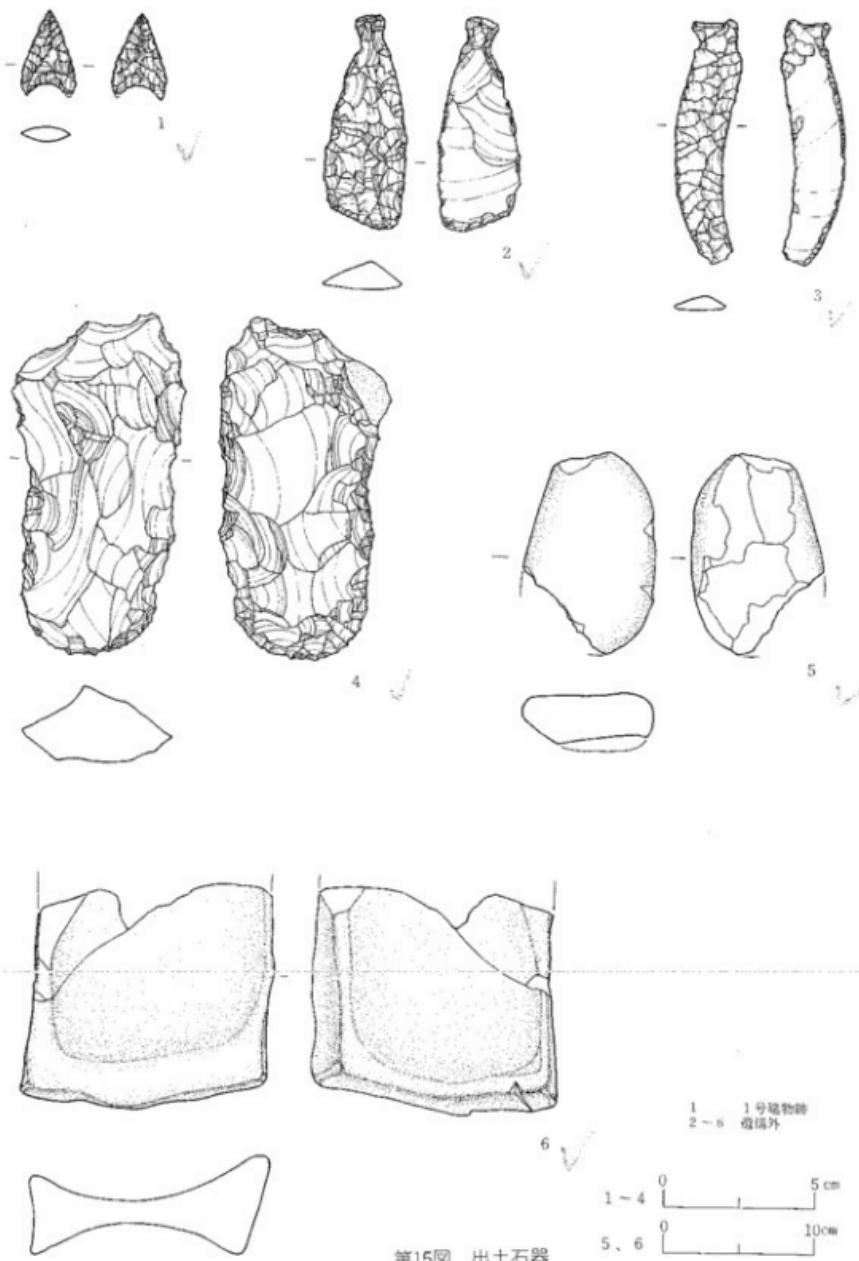
両面に二次加工を施すもので、基部は厚味がある。側縁は直線的に、先端部は弧状に作られている。石質は硬質頁岩である。

石錘（第15図5）

偏平な自然石の両端を打ち欠いたものであるが、破損している。

石皿（第15図6）

破損品である。両面が大きくぼみ良く磨れ、1側面も良く磨れている。



第15図 出土石器

まとめ

本遺跡は御所野台地の南西部、南西に面した標高約30mの台地縁辺部に位置する。以下、遺構と遺物について述べたい。

検出遺構は、堅穴住居跡4軒、建物跡3棟、土壙15基で、平安時代に属するものである。堅穴住居跡は4軒検出された。規模は一边が3m前後の比較的小型のものである。平面形は方形を呈するもので、3号住居跡は拡張を行っている。主軸方向は1号・3号・4号住居跡が北でやや西に傾き、2号住居跡が西でやや南に傾いている。主柱穴が確認された住居跡は1号・3号住居跡で、いずれも4本柱である。カマドは南壁に付設されるもの（1号・3号・4号住居跡）と、東壁に付設されるもの（2号住居跡）があり、南壁に付設されるものは全て東側に位置し、東壁に付設されるものは北側に位置している。支脚は2号・3号住居跡で認められ、2号住居跡は赤褐色土器杯を伏せ、3号住居跡は人頭大の川原石を据えている。煙道部は1号・3号・4号住居跡は溝状もしくはトンネル状で、2号住居跡は明確に検出できなかった。これらのことから住居跡は最低でも2時期が予想される。本台地で当該期の住居跡が検出されている遺跡は9遺跡で、「下堤C遺跡」からは31軒（他に堅穴遺構が8軒）とまとまって検出されているが、他は1～5軒の検出である。建物跡は3棟検出された。1号建物跡は3間×2間の身舎に4面廊をもつ掘立柱建物跡で、溝が巡るものである。規模、柱掘り方等から大型の建物跡が想定され、一般集落では見受けられない形態である。当該期の建物跡は「深田沢遺跡」で8棟検出されているが、同形態の建物跡は本台地では初見であり、本遺跡では1棟のみの検出である。県内の集落跡でも同形態の建物跡は認められない。建物に溝が巡る例は平鹿郡大森町「下田遺跡」、鹿角市「御休堂遺跡」等があげられるが、建物構造に差異がみられる。また、山本郡峰浜村「中田面遺跡」からも溝が巡る建物跡が検出されているが、中世に属するものである。建物跡と断定はできないが、ほぼ同規模である「下堤C遺跡」の方形溝状遺構も1基のみの検出であり、いずれも特殊な意味をもつ施設と考えられる。2号建物跡は3間×1間、3号建物跡は2間×1間の掘立柱建物跡で、いずれも主軸方向は同方向、柱掘り方もほぼ同じである。3号住居跡と一部重複し、建物跡の方が新しく、堅穴住居から掘立柱建物への変遷を示すものと考えられる。土壙は15基検出された。円形、楕円形を呈するもので、浅いものが多い。6号土壙が1号住居跡と、7号土壙が4号住居跡と、8号～11号、15号土壙が3号住居跡と重複し、11号土壙以外は全て住居跡より新しい。15号土壙は底・側面が火熱を受けているものである。特に側面が強く火熱を受け、底面には3～5cm炭化物が堆積しており、なんらかの焼成遺構であると推測される。本台地「野形遺跡」の赤褐色土器焼成窯跡と近似するが、赤褐色土器が出土していないなど決定には至らない。それぞれの遺構の時期については、住居跡、建物跡、土壙の大部分の遺構から底部切り離し回転糸切り無調整の赤褐色土器環が出土しており、本遺跡も「下堤C遺跡」同様9世紀後半から10世紀頃と考えられる。しかし、住居跡の主軸方向、カマドの位置、建物跡等から数時期が予想されるが、時間的には大差はないものと推測される。

出土遺物は、土器、石器である。土器は繩文時代と平安時代に大別される。繩文時代の土器は4点のみで、全て遺構外出土である。地文のみのもので、時期を特定できない。平安時代の土器は土師器、赤褐色土器、須恵器で、遺構内・外出土である。土師器は壺・台付壺・皿・台付皿・甕で、甕以外は内面黒色処理を施すものである。壺は破片であり、底部切り離しは不明である。甕は長胴で、口縁部が「く」の字状に外反し、胴部は巻毛目調整を施すものである。赤褐色土器は壺・甕である。壺は底部切り離し回転糸切り無調整であるが、1点のみ底部切り離し静止糸切り無調整である。墨書き土器は1点認められるが判読は不明である。甕はロクロ皮形で、胴部にケズリ調整を施し、口縁部は頭部が外反して口唇部が立ち上がるものである。須恵器は壺・蓋・壺蓋である。壺は底部切り離し回転糸切り無調整である。壺及び蓋の2点は転用碗である。出土遺物の中では赤褐色土器壺が最も多い。底部切り離し回転糸切り無調整の赤褐色土器壺は「下堤C遺跡」で多量に出土しており、9世紀後半から10世紀頃と考えられる。

本遺跡は遺構の検出状況から小規模な集落であったと推測されるが、本年度は遺跡の一部分の調査ということもあり遺跡を明確に把握することができなかった。特に1号建物跡の性格や他の遺構との関係については言及できなかった。来年度も繼續調査の予定であり、周辺の調査を実施して遺跡の性格を再考する必要がある。

註1 「下堤D遺跡発掘調査報告書」 秋田市教育委員会 1982年3月

「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 湯ノ沢B遺跡」 秋田市教育委員会

1983年3月

「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 野形遺跡」 秋田市教育委員会 1984年3月

「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 板ノ上F遺跡 深田沢遺跡」 秋田市教育委員会 1985年3月

「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤C遺跡」 秋田市教育委員会 1987年9月

「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤A遺跡 下堤B遺跡」 秋田市教育委員会 1988年3月

「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 秋大農場南遺跡」 秋田市教育委員会 1992年3月

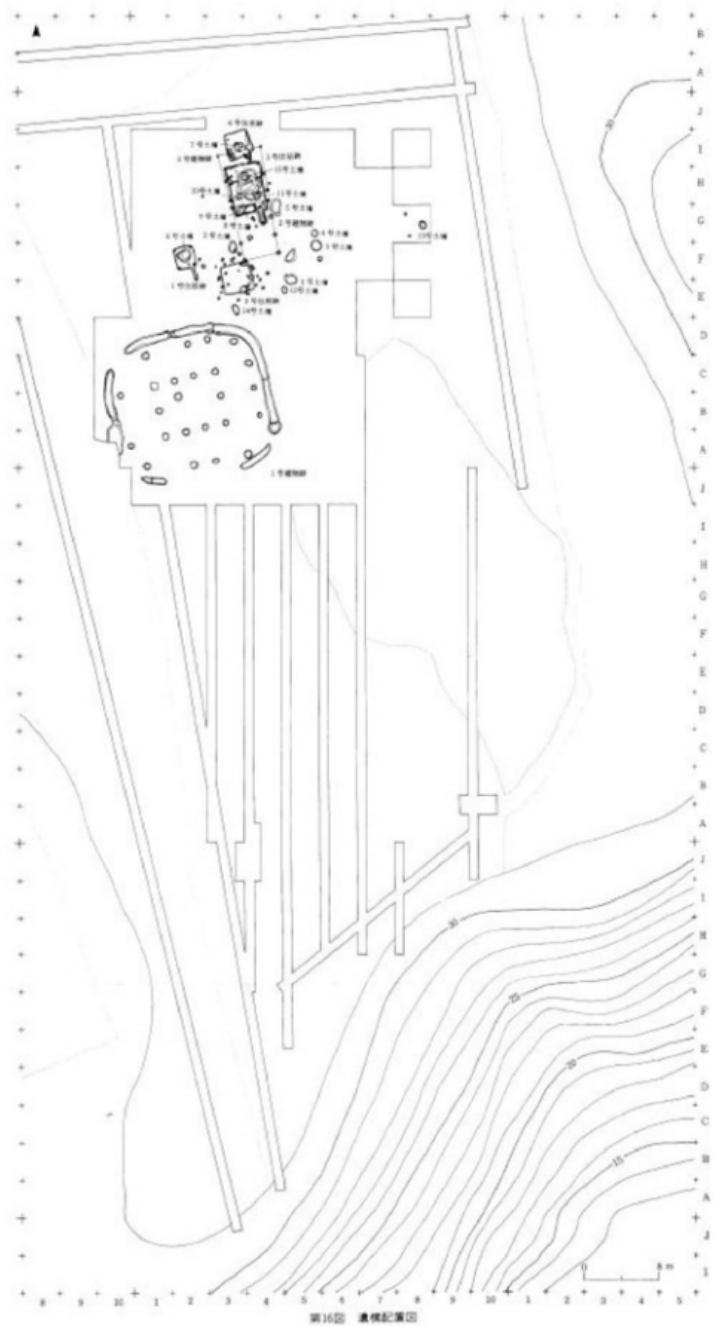
註2 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ 下田遺跡」 秋田県文化財調査報告書第189集 秋田県教育委員会 1990年3月

註3 「御休堂遺跡発掘調査報告書」 鹿角市文化財調査資料19 鹿角市教育委員会 1981年3月

註4 「中田面遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第74集 秋田県教育委員会 1980年3月

参考文献

- 秋田市教育委員会：「秋田城跡」 昭和50年度秋田城跡発掘調査概報 1976年3月
- 財団法人栃木県文化財振興事業団：「自治医科大学関連地区 下古館遺跡」 昭和63年度埋蔵文化財発掘 調査概報 栃木県埋蔵文化財調査報告書第104集 1989年3月
- 福島市教育委員会、財団法人福島市振興公社、佐川冷蔵株式会社：「房ノ内遺跡 房ノ内遺跡発掘調査報告書」 福島市埋蔵文化財調査報告書 第26集 1988年3月
- 福島市教育委員会、財団法人福島市振興公社、株式会社安栄：「古屋敷遺跡 古代建物跡群の調査」 福島市埋蔵文化財調査報告書 第36集 1990年3月
- 宮城県教育委員会、利府町教育委員会、建設省東北地方建設局仙台工事事務所：「利府町郷瀬遺跡II 一 仙塙道関連遺跡発掘調査報告書」 宮城県文化財調査報告書第134集 利府町文化財調査報告書第5集 1990年3月
- 宮城県多賀城跡調査研究所：「名生館遺跡I 一玉造桟跡推定地」 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第6集 1981年3月
- 宮城県多賀城跡調査研究所：「東山遺跡I」 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第12集 1987年3月
- 宮城県多賀城跡調査研究所：「東山遺跡Ⅱ 一質美郡衛跡推定地」 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第14集 1989年3月
- 山形県教育委員会：「平形遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書」 山形県文化財調査報告書第26集 1980年3月



第16圖 廣場配置圖



調査前（南→）

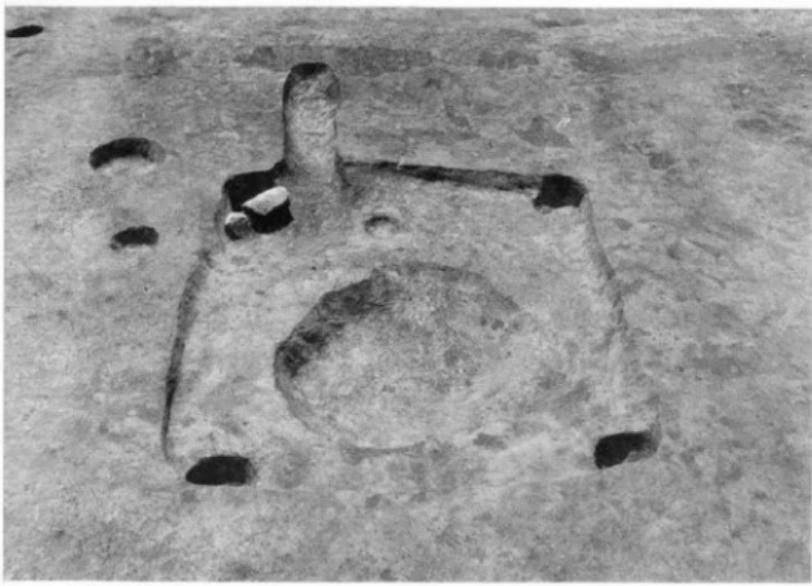


調査区全景（南→）

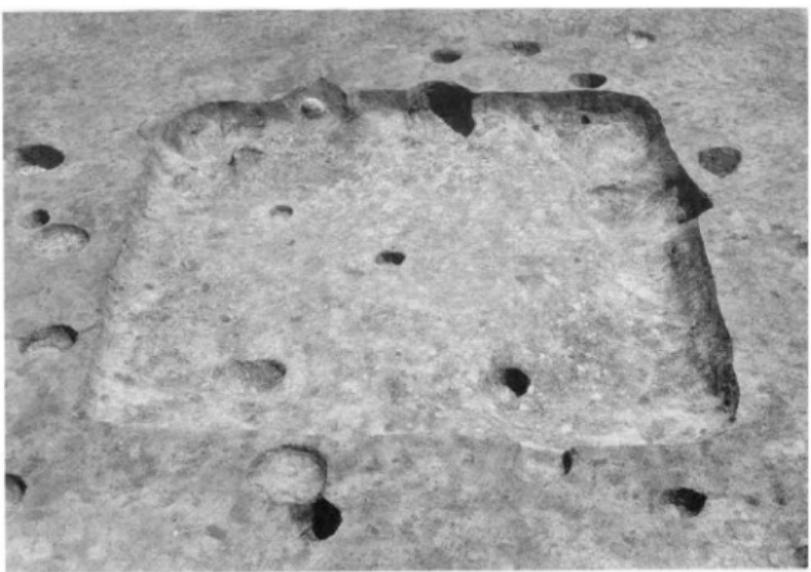
図版 1



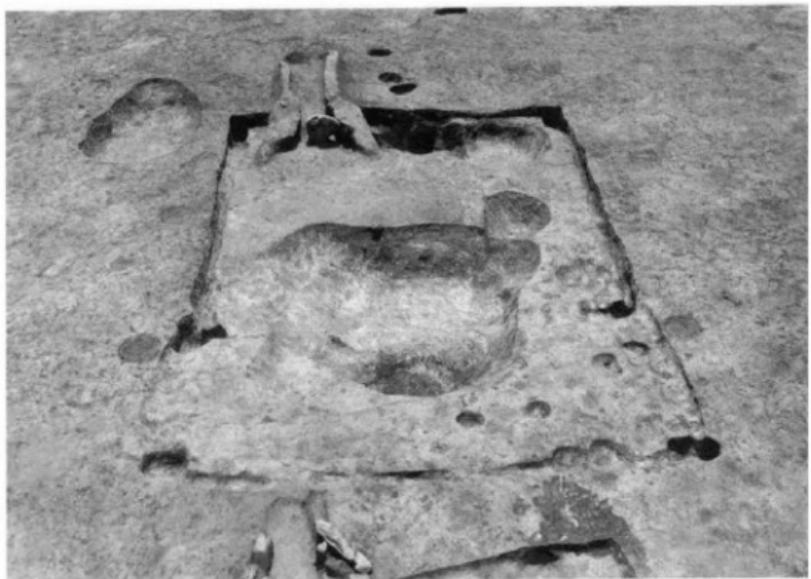
調查區全貌（北→）



1號住居跡（北→）



2号住居跡（西→）



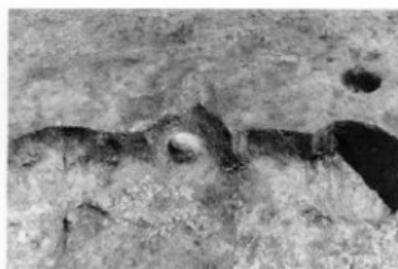
3号住居跡（北→）



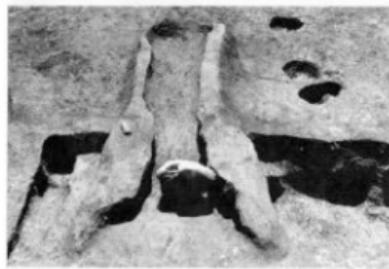
4号住居跡（北→）



1号住居跡カマド



2号住居跡カマド



3号住居跡カマド



4号住居跡カマド



1号建物跡（南→）



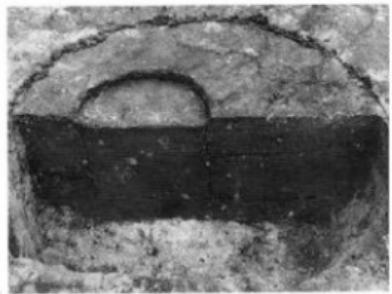
1号建物跡溝跡（東辺）



1号建物跡溝跡遺物出土状況



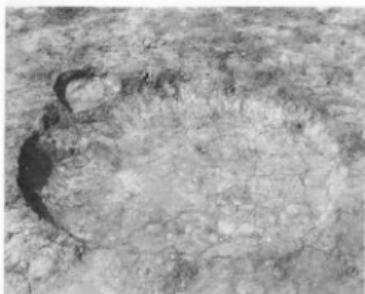
1号建物跡柱穴土層断面



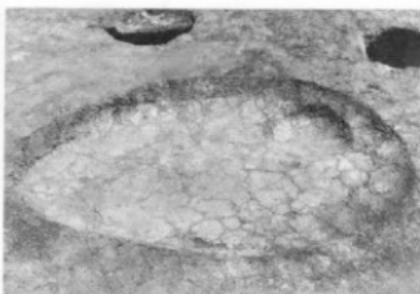
1号建物跡柱穴土層断面



2、3号建物跡（南→）



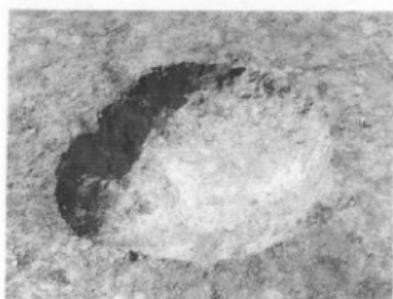
1号土壤（南→）



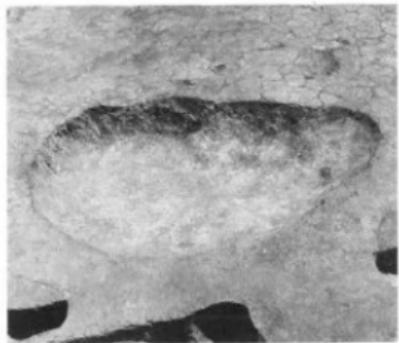
2号土壤（西→）



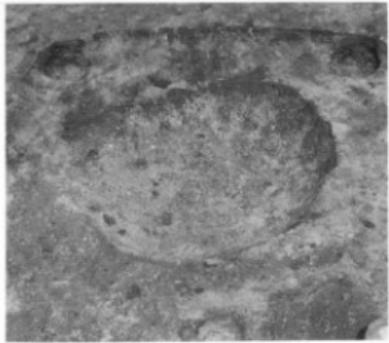
3号土壤（南→）



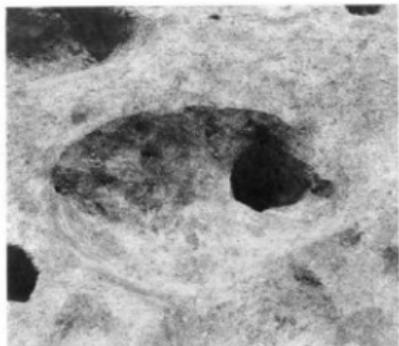
4号土壤（南→）



5号土壤（西→）



6号土壤（南→）



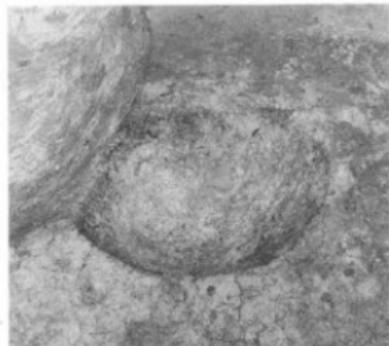
7号土壤（东→）



8号土壤（南→）



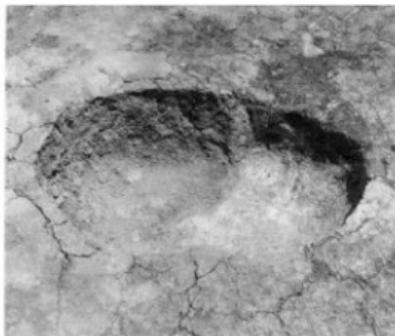
9号土壤（南→）



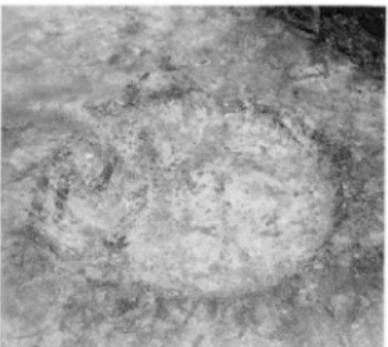
10号土壤（西→）



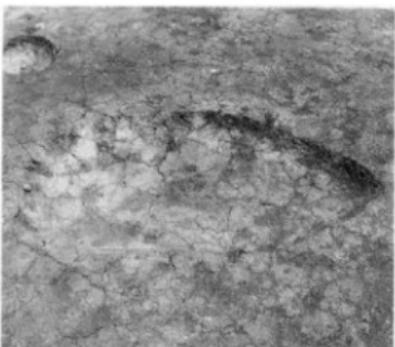
11号土壤 (西→)



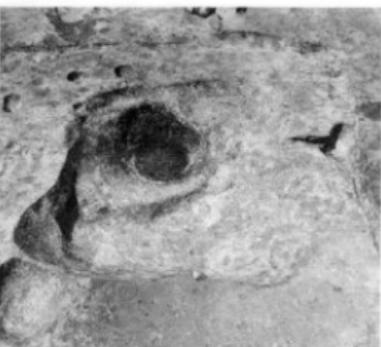
12号土壤 (西→)



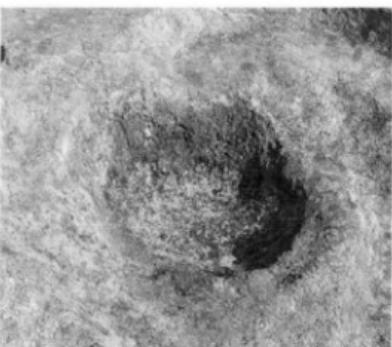
13号土壤 (南西→)



14号土壤 (南西→)

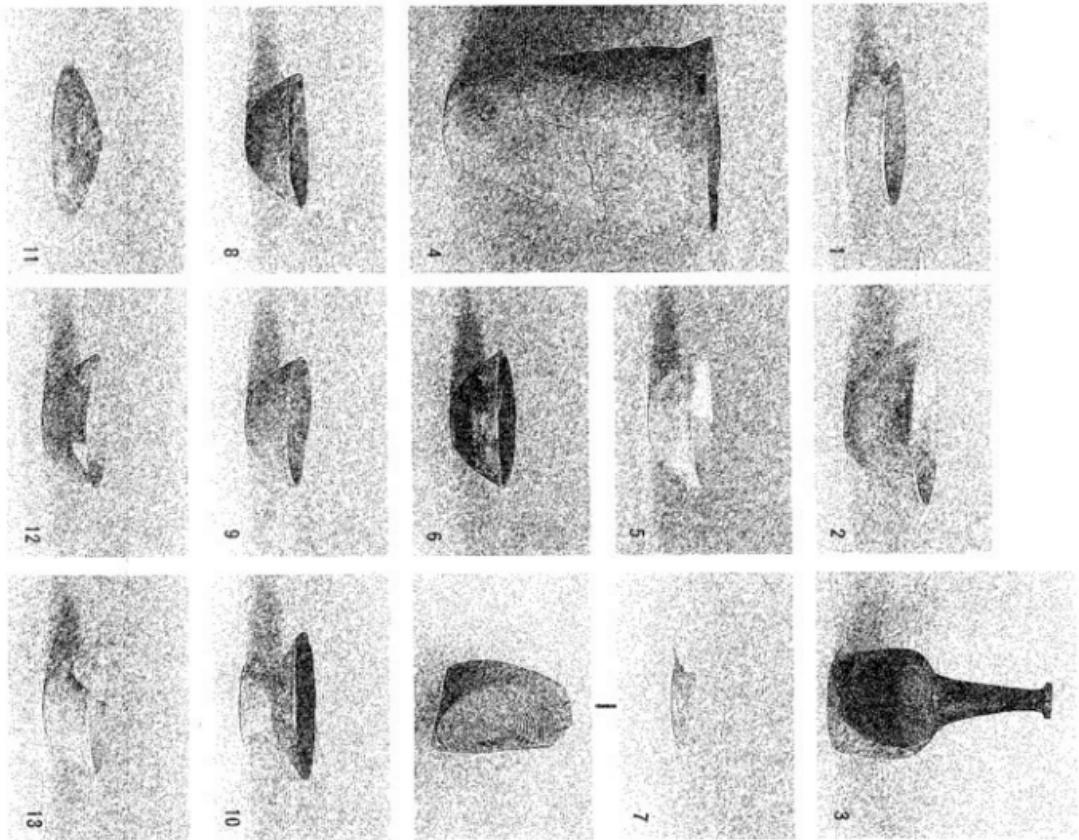


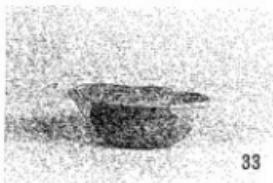
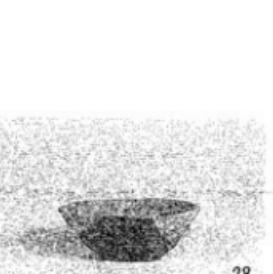
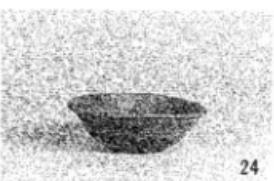
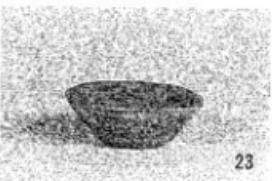
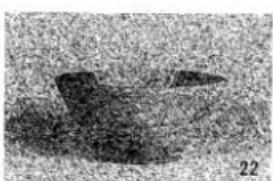
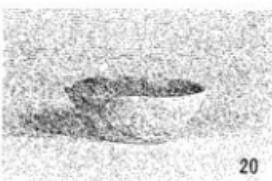
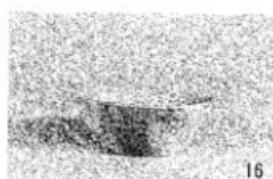
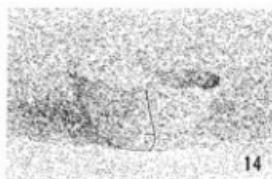
15号土壤 (南→)



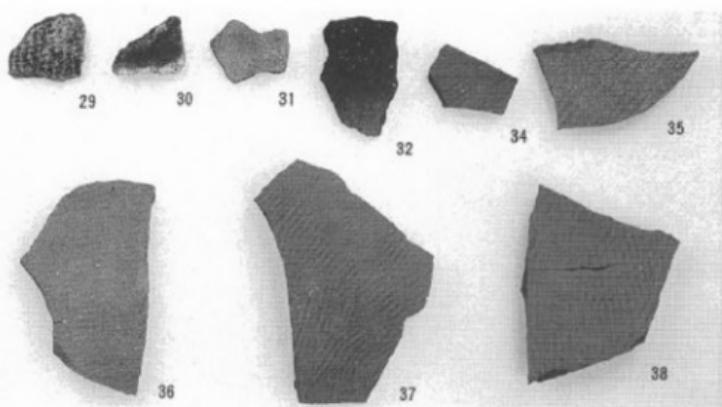
15号土壤 (西→)

1 ~ 4 2号住居跡
5 ~ 11 3号住居跡
12、13 4号住居跡

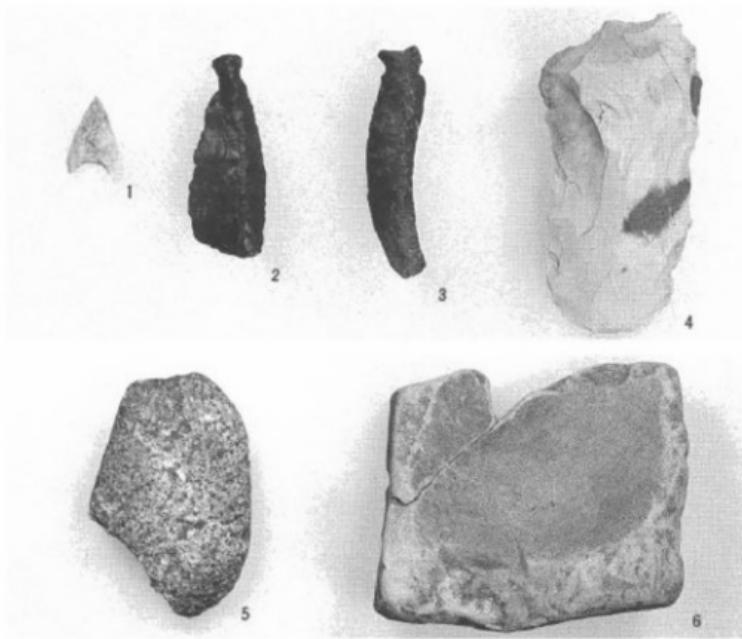




14 1号建物跡 25、26 9号土壙
15 2号土壙 27、28 15号土壙
16、17 6号土壙 33 造構外
18~24 8号土壙



遺構外出土土器



出土石器 1 1号建物跡
2~6 遺構外

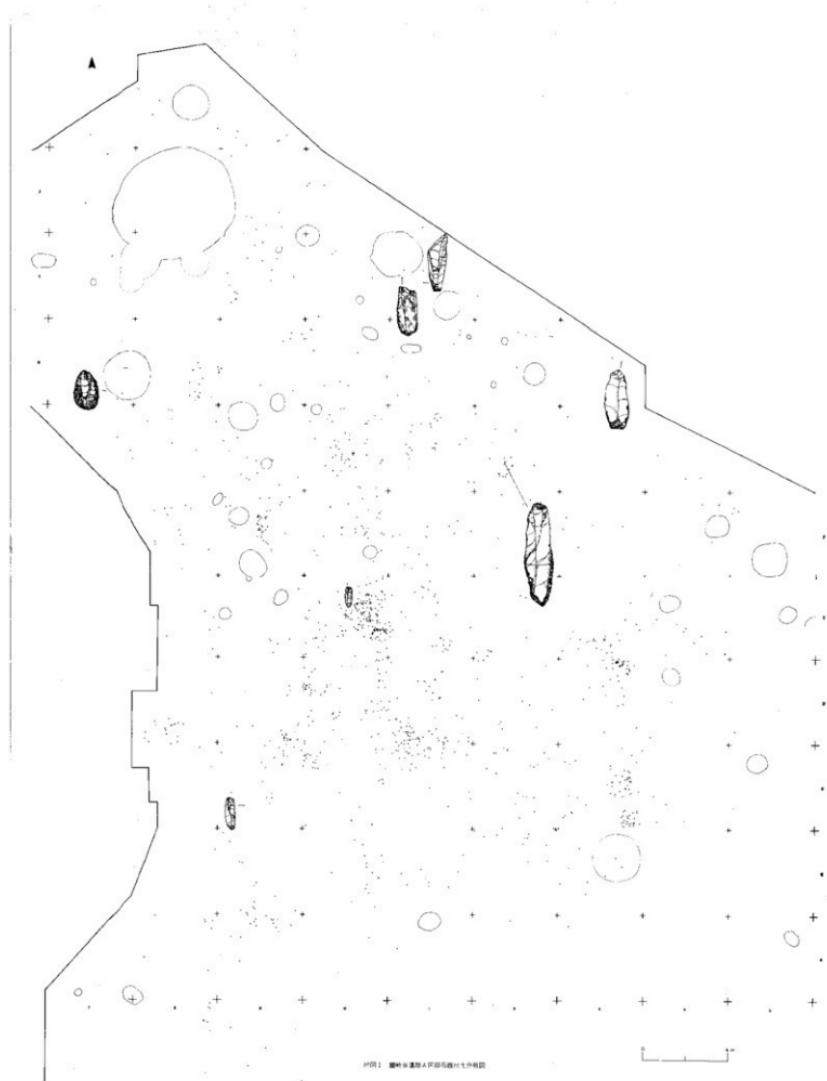
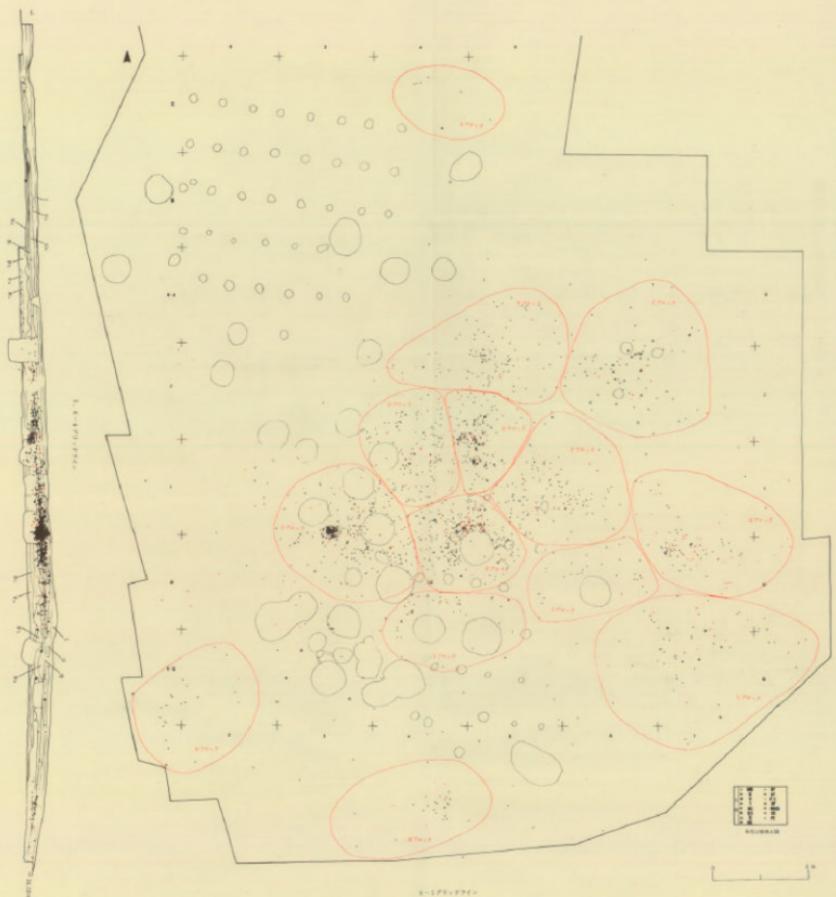


图41 银川市西夏陵人头骨的表面特征图



付図2 日本国立公園・名勝分布図

秋田市
秋田新都市開発整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成5年3月

発行 秋田市教育委員会
